

漆学講座

前座話 伝統工芸品 / 伝統的工芸品

「伝統工芸品」とは、昔ながらの技術・技法が《そのまま》に現在製造されている物。

「伝統的工芸品」とは、昔ながらの技法を根幹としているが、一部の工程を機械化するなどにより、製造された工芸品で、通産大臣により指定されている。

「伝統的工芸品」の定義は（1974年に交付された「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」によると、

1. 主として日常生活の用に供されるものであること。
2. 製造過程の主要部分が手工業であること。
3. 伝統的技術又は技法によって製造されるものであること。
4. 伝統的に使用されてきた原材料であること。
5. 一定の地域で産地を形成していること。

現在 17 業種がある。《織物、染色、陶磁器、金工、漆器、木工、和楽器、和紙、その他》飛騨春慶は通産大臣（当時）指定伝統的工芸品の第 1 次指定を 1975 年に受けました。現在までに 3 3 次の指定、190 品目の工芸品が指定を受けています。

岐阜県では、美濃焼き、飛騨春慶、一位一刀彫、美濃和紙、岐阜提灯が指定を受けています。



春慶塗の手塗りシール

第 1 時限 漆って何？

漆は、漆の木から採った樹液。そして、不思議な力を持っています。酸にも強く、アルカリにも強いが紫外線には弱い。

塗料として最も古くから漆は使われて来ました。漆は中央アジア、中国、朝鮮、日本などに生育する植物で、生漆の成分は 70%のウルシオール(C₁₂H₃₂O₂)と20%の水分、プラス10%の漆を固める酵素ラッカーゼを含むゴム質から出来ている。ラッカーゼは温度 25 湿度 80%でよく反応して硬化する。漆の技術は中国から伝えられたということになっているが、中国で発掘された最古の漆器が浙江省河姆渡遺跡で発見された外朱塗漆椀(紀元前 4400 年ごろ)のものである。

ところが、福井県三方町の鳥浜遺跡(紀元前 4500 年ごろ)から出土の竹を結わえて朱漆を塗った櫛。石川県七尾市の三引遺跡(紀元前 5000 年)で発見された櫛。青森県の三内丸山遺跡(紀元前 3500 ~ 2000 年)からは朱漆塗りの大皿や櫛が発掘されている。最近の研究では、最古の漆製品は函館近く(垣ノ島B遺跡)で見つかった“赤い漆を塗った糸”(紀元前 7000 年)とされています。つまり、日本では縄文早期から漆は塗料として用いられており、その技術を向上させたのが中国からの渡来人ではなかったろうか。

縄文時代(紀元前 16500 ? ~ 3000 ?)の漆製品の出土は、中国より日本の方が多く、“漆製品のルーツは日本”と言う研究者居ます。また、1万1千年前の漆の木が鳥浜遺跡で発見され、落

葉樹である漆は日本起源かもしれない？！という研究もあります。弥生時代の中国との交流の中で、更に技術の発展がなされたとの説もあります。飛鳥時代になると仏教文化が伝わり、桶で作られた仏像の中にも漆を塗って彩色したものや、漆で金箔を貼ったものがある。

文武天皇が大宝 2 年(702)に定めた大宝律令では、大蔵省に漆部司をおき、正、佑、令史と漆部 20 人がいた。律令では百姓に漆を育てることを命じ、租庸調の調として諸国の漆産地にも漆を献じることを定めている。

図 1 は、漆採取の模式図です。溝のところに、じわじわとしみ出てきます。ゴムのように出ないので、耳かきのようなもので、採ります。1 本の木から数十グラムから 200 グラムくらいしかとれません。

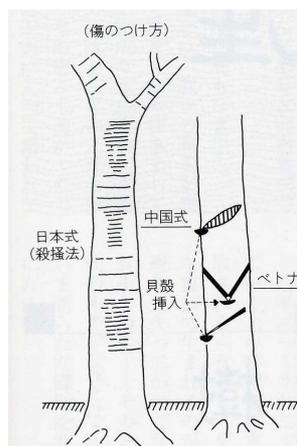


図 1 漆掻き

第 2 時限 漆の化学

少し、難しい話をします。ごめんなさい。

普通「漆が乾く」と言うのですが、実際に、「漆が乾く」には適度な温度と湿度が必要です。10 ~ 30、65% ~ 100% が最適です。湿度がかなり高いのです。つまり、洗濯物が乾くように、漆の中の水分がなくなり、乾燥するのではないのです。

漆は酵素（ラッカーゼ）でかたくなります。漆の主成分であるフェノール化合物のウルシオールが重合して、高分子化合物を造るのです。天然のプラスチックです。

フェノール樹脂(フェノール - ホルムアルデヒド樹脂、ベークライト、石炭酸樹脂)は、フェノールとホルムアルデヒドを原料とした熱硬化性樹脂の一つで、世界で初めて植物以外の原料より、人工的に合成されたプラスチックである。硬化させた樹脂は、3 次元的な網目構造を持つ。

- 電氣的、機械的特性が良好で、合成樹脂の中でも特に耐熱性、難燃性に優れるという特徴を持つ。耐油、耐薬品性も高いが、アルカリに弱い。また、これらの性能の割に、比較的安価である。
- 樹脂そのものを製品として成型することはまれで、通常はフィラーや繊維の連結材(バインダー)として用いられる。耐熱性が要求される自動車部品や、絶縁体などとして電気製品に利用されている。
- 厳密にはフェノールとホルムアルデヒドを反応させたものがフェノール樹脂である。しかし、クレゾール等のフェノール類を用いても同様の樹脂ができるため、これらの樹脂を含めてフェノール樹脂と称することが多い。

下図の一つの丸が 0.5 ミクロン(1000 分の 0.5 ミリメートル)の大きさです。このように、とても小さな粒が集まったのが、漆の層になります。



ウルシオール...ウルシオールは下に示すような構造を持つ化合物である。2 個のフェノールであり、置換基 R の異なる誘導体の混合物である。図で R は $(CH_2)_{14}CH_3$, $(CH_2)_7CH=CH(CH_2)_5CH_3$, $(CH_2)_7CH=CHCH_2CH=CH(CH_2)_2CH_3$, $(CH_2)_7CH=CHCH_2CH=CHCH=CHCH_3$, $(CH_2)_7CH=CHCH_2CH=CHCH_2CH=CH_2$ などを表す。

ラッカーゼ：酵素 たとえば、でんぷんを分解するアミラーゼなどが酵素
 +ポリフェノールの合成・分解をはじめ、様々な酸化反応を触媒する酵素
 +パルプの漂白、人口色素の脱色、食品、バイオセンサーなどに利用され始めている

各国産漆の主成分

産地名	主成分	分子式	構造式
日本	ウルシオール	$C_{21}H_{32}O_2$	
中国	ウルシオール	$C_{21}H_{32}O_2$	
ベトナム台湾	ラッコール	$C_{23}H_{36}O_2$	
ビルマ	チチオール	$C_{23}H_{36}O_2$	

そして、一段一段の漆の層を構成する小さな粒の外側は、ゴム質で出来ています。そのため、酸にも強いのですが、熱や紫外線に弱いのです。輪ゴムを思い出してください！
 お手入れの時大事なことは、拭くこと。使った木綿の布がおすすめ。紫外線で劣化した表面がふかれ、いつも新鮮な漆の面が出てきます。

ええ~~~~!!! 漆がなくなる。

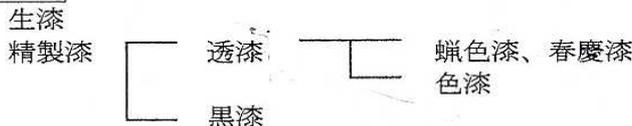
安心してください。約 0.5 mm 漆の層が一年で一層ずつ削れても、なくなるまでに 1000 年。

第3時限 漆の種類

春慶漆を塗ったものは透明です。これが春慶漆です。混ざり物のない、漆そのものの色です。ですから、木目が透けて見えるのです。

透明な漆に顔料（日本画に使う顔料と同じもの）を混ぜて作ります。黒のつや消し漆。鉄の粉を混ぜて漆を酸化させて黒くします。

漆の種類



漆液の成分

	日本産漆	中国産漆	ベトナム産漆
水分	22%	32%	30%
ウルシオール	69%	58%	52%
ゴム質	8%	8%	16%
含窒素物	1%	2%	2%

第4時限 漆と漆器

資料5(桧)を手にとってみてください。そして、爪で傷をつけてください。いいのかって？もちろんです。でも、その時の力かげんは、覚えていてください。

資料6(栃), 7(竹), 8(貝), 9(漆のみ)を, 同じくらいの力で, 押してみてください。

5(桧)と6(栃)は, へこみますが, 7, 8, 9は, そのまま。9から, 分かるように, 漆そのものはとても硬いのです。

しかし, 春慶塗は, ほとんど, 栃と桧。強く押すと, または, ぶつけると(どの程度か忘れたら, 5と6を傷つけてください)傷になります。傷は, よく使っていることの証でもあるのですが・・・。

漆そのものと漆器の強さの違い, 分かっていただけたでしょうか? 漆器の素地は, 木です。木の硬さより硬いのですが, 蹴飛ばしたりしないでください。

好きな器を見つけて いつまでも かわいがってください。

第4時限 おわり

休み時間

- * 漆は, 色々なものに塗れます。プラスチックにも下処理をすれば, 塗れます。安くて, 重い漆器などは, 漆が塗ってあっても, 素地はプラスチックかもしれません。必ず「家庭用品表示」が, ありますから, たしかめてください。 試しに, 100円ライター - にぬりました。 デュポンのライター - とは言いませんが, なかなかの物!
- * よく手入れの方法の質問を受けます。 基本は, 使ったら拭いて, かたづける。 拭くには, 使い古しの木綿の布を使います。 何度か洗ったガ - ゼなどは, 最適です。 ひどい汚れの時は, テレピン油をつけるとよいです。
- * 漆は接着剤として, とても, すぐれものです。 乾くのに時間がかかるのですが, 1度着くと, 丈夫です。 昔から, 特に陶器の割れた時などに使われていました。 金継と言い、元の器より高価になることもあるのです。

キ - ソン コ - ソン カ - ソン コ - ソン

休み時間 おわり

第5時限 春慶塗：名前のこと

「春慶(はるのよろこび)塗り」という、とても、目出度い名前の漆器は他には、ありません。ほとんど、地名がついています。輪島塗り、会津塗り、若狭塗り 等々。

では、春慶の名前は、どこから来たのでしょうか?

飛驒に伝わる話と全国に伝わる話とあります。

飛驒に伝わる話

鎌倉時代に道元禅師について宋に渡った陶工加藤景正が安貞元年(1227)に帰国し、茶つぼを制作した。その色が茶褐色の中に、飛びとびに黄色の斑点があったのと、景正の雅号春慶から「飛び春慶」の名が有名になった。

そして、慶長17年(1611)に大工高橋喜左衛門のつくった批目(へぎめ)の盆に、塗師成田三左衛門義賢が、黄色を生かした漆塗りを作り、金森重近(高山の城主)に献上した。その色が“飛び春慶”と似ていたため、春慶塗の名がついたとされています。

全国に伝わる話

応永(1394 - 1428)頃に、堺の漆工春慶が考案したと言われる。その後、慶長年間

(1596 - 1615)に飛騨で春慶塗がおこり、さらに、延宝年間(1673 - 81)には、飛騨の漆工山打三九郎が、秋田県の能代に伝え、能代春慶を始めたと言われています。

おまけの話

春慶塗と言われる塗り物は、各地で作られていました。

飛騨春慶、能代春慶、粟野春慶(水戸市の近く)、木曾春慶、日光春慶。

たぶん、飛騨から多くの工人が全国に伝えたのでは、と思います。

我が神岡町で、春慶塗が始まったのは、文書で分かります。大正12年に高山市から池田茂蔵氏を招き、地元の轆轤挽きの盆や茶托などに春慶塗をしたのが、始まりでした。完成は、大正14年(1925年)。2年かけて、挽き物の春慶塗は、神岡町で完成しました。

第5時限 これまで

第6時限 春慶漆

漆には、大きく分けて4種類があります。

1. 生漆(木から採集したままの漆)
2. 透漆(生漆を精製したもの)
3. 色漆(透き漆に顔料を混ぜたもの)
4. 黒漆(生漆を精製する時、鉄を入れ漆を酸化する)

更に、精製の仕方、艶のある漆とない漆に分ける事が出来ます。

春慶漆は、透漆(すきうるし)に荏油を加え、透明度を増した漆です。そのため、木目がきれいに透けて見え、輝くように見えます。

荏油は、時と共に表面に染み出し、漆器の透明度が、更に増します。自然の美しさだけで作られているのが、春慶塗の漆器なのです。

漆の精製 (生漆を加工すること)

くろめ・・・39以下で加熱し、漆の中の水分を飛ばす。これ以上の高温で加熱すると、漆の中の酵素(ラッカーゼ)が死んでしまい、硬化しなくなります。

なやし・・・漆を攪拌して、艶(つや)を出す。

自然の素材だけで作られているのが、春慶塗の美しさのもとです。

その美しさが、私は大好きです。



漆の手くろめ

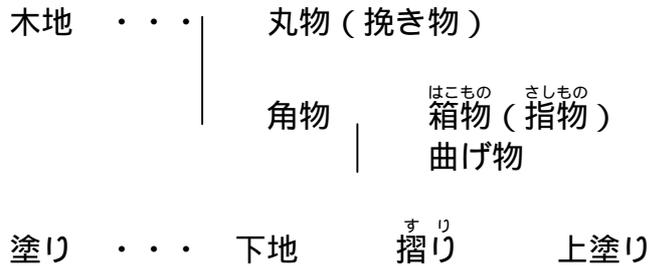
浅いボールのような“くろめ鉢”と櫂(カイ)を使い、日向で温度管理をしながら、クロメます。

第6時限 おしまい

第7時限 過去、現在

この時間は、塗り方の移り変わりについて話します。

製作工程



塗り工程

1. 塗り方で一番変わったのは、下地です。梔子や雌黄などで着色し、下地をします。初めは、生渋（柿渋）膠（にかわ）や姫糊などで、木口（木の切り口）の目止めをしてから、摺り、上塗りをしたようです。高山市の桐本久五郎（1877 - 1958）が、豆汁（ごじる = 大豆を水に付けふやかしてから、つぶして液状にしたもの）を使った下地塗りを完成しました。同じ時期に、東京芸大の三山喜三郎氏がカゼイン（牛乳のたんぱく質を抽出し、水にといて使用）を使う下地の開発をしました。現在の春慶の下地は、多くの方がカゼインを使っています。着色の仕方で3種類の春慶塗があります。
 - 黄春慶・・・梔子（くちなし）・黄色4号
 - 紅春慶・・・弁柄・紅花・赤色104号
 - 墨染春慶・・・墨
2. 摺りは、生漆をつかいます。
3. 上塗りは、春慶漆を使います。昔と今の一番の違いは、上塗りの厚さです。昔は、薄く、今は、厚い。

* 膠（にかわ） = 動物の皮や骨などを煮溶かした液。接着剤になる。

第7時限 おしまい

休み時間

全国各地の漆器の産地(または、その近くに)には、漆屋があります。漆屋とは、漆を精製したり、色漆を作ったり、漆塗りの道具を売っています。

しかし

伝統的工芸品の産地の指定を受けている高山市にも神岡町にも漆屋は、ありません。

もちろん、漆を使わないからでなく、塗師自身が漆を精製するからです。

これは、他の産地ではないことです。漆は、産地で違い、採った年でも違います。

6月から10月位までが、採取の季節ですが、採った時でも違います。

漆は、生き物であると共に、魔物でもあります。その漆を、なだめすかしながら、精製して塗ります。

漆の精製は難しいのですが、毎年、新しい発見があります。

第8時限 漆器が完成する時

塗りあがった時、その漆器が完成すると思う人？

私も、浅はかにも、そう思っていました。すみません。

しかし、自分の作品を何年かしてみた時、違いがある事に気がつきました。

艶と色が、いい。

塗りあがった時より、すばらしいのです。この違いは、何だろうと考え込んでしまいました。そして、分かった事は、使っても、使わなくとも、年に2回程、風に当て、拭いている事でした。

“漆が乾燥する”と言いますが、それは、酵素により硬くなる事です。漆器は、化学製品ではなく、なまもの。陶器も使っていると、とても、いい色になります。

たまには、のんびりと、抹茶でも(コ・ヒ・党ですか)

飲みながら、拭いてあげてください。

よ・ろ・し・く お・ね・が・い・し・ま・す。

第8時限 しゃみしゃっきり